１９２５年（大正14年）〔21歳〕
「辰雄日誌１９２５」No. 6 （3）
――１９２５年３月１～31日――

小池辰雄

○１９２５年３月１日（日）

晴。輝きの春の日、第一日を迎えた。神、全能、宇宙、星辰、万物、世界。父、基督、基督教、十字架、贖罪、復活、昇天、再臨、聖霊。是等の語は何と僕の心を、否、人間の心を大にし浄くし歓ばしむるものであるか。現世とは何と呪われたる語なる哉。人よ、人類よ、何を齷齪（あくせく）して小闘、反目をなすや。人よ、真純の愛と、真純の業に全霊全身を任（ゆだ）ねざるや。

桐寮の近藤と杉浦との心の打ちあけを聴いた。僕も共にその坐に居て話した。そしてついに、信仰の人と信仰を未だ有たざる人との根本の相異、実に、彼等に対して深刻の涙を浮かべざるを得ざる相異を感じた。僕はこれを話すことは出来なかった。話しても、到底真にわかってくれるものでないことを知ったからである。祈るばかりである。彼等のために、キリストにすがりて泣き、彼等を救わんことを祈り願うばかりである。

ああ、僕のこの神の恵、このいただける信仰を、彼等に。聖霊は彼等のためにもいたんでいる。主と共に、十字架の道を、人々を救わんために。

我が一生の捧げらるべきは、いよいよ明らかなこととなって来た。不信の国へ生まれたる彼等、不信の境遇、不信の教育、不信の友、あらゆる「不信の、不信の」によってかこまれたる彼等よ。我は、彼等のために神の犠牲とならん。エス様よ、使い給え。ただ人の永遠の生命のために。アーメン。

○１９２５年３月２日（月）

晴。午後3時半頃、附属の連中12名、桐寮に集って記念撮影をなした。1枚は玄関前で、1枚は八畳で。この八畳は即ち僕の過去2年間の書斎であった。東南両面に開けて、朝日射し入りて、夕陽の沈むまでその日の光を受ける明るい室である。日光と親友なる室である。人はいろいろ言わん、しかし僕はその日光と友なるが故に、他の欠点を悉くゆるして、この室を好むものである。光の室なる実に於て、これに勝る室は他にさほどさがし得ないことと思う。

桐寮はこの3月を以て閉寮の機運に会した。ただ惜しきはこの室――それはまたほかに理由もあるが――をすてることを惜しむ。さりとて桐寮は最早持続すべくもない。散るその運命に対しても僕は感謝することがある。桐寮の2年、僕は色々の経験をした。ことに友人（真の意に非ず）より色々心に沁みることを持たせられた。それは、僕の信仰を毫も妨げるもの

ではない。益々、信仰に立ちかえらしむる痛ましきものである。この世とこの世のものに接して、益々信仰に至らしめたものである。この室で祈った、読んだ。祈った。しかし祈りは早々聴かれるべくもなかった。世のものは相変わらず世のものであった。僕のすることは水泡に帰する如くである。馬鹿らしい（所謂この世の）ことである。しかし、これはやめられぬことである。どうしてもやめられぬことである。内に在ます基督の愛、我をかくなさしめるのである。なげきあり、涙あり、祈りあり、失敗あり、祈りあり。しかし、すべてを神にゆだねて、神のためになすのみ。

○1925年3月3日（火）

晴。我が恵、汝に足れり。然り、神よ、誠に有難く有難く御恩恵を戴きます。

今日、3年生送別の式があった。常々内容のないところに、かかる場合に内容のあるはずがない。それは形式的であった。校長よ、何故にもっと真剣な話が出来ないか、愛のある心をもち得ないか。その罪を校長も身に問わない。日本国教育者に問う。生徒よ、何故に目前のことに動くや、さわぐや、汝等の良心に問う。汝等は教育者によって指導さるべきものでないことを真に知らない。故に、やはり教育者、または社会の一般の思潮を追うて動く。動かざる貴きものあるを知らない。眼は開ける如くして道に迷う。

センチメンタリスト、ロマンティスト、ペシミスト、竟にあきらめ哲学の人々。汝等は頭と口で生きている。思索とよ、現代人によりてそれは呪われたる哉。科学とよ、現代人の名の故にけがされたる哉。芸術とよ、また然り。何ぞ立ち帰らざる。敬虔、峻厳、雄々しくして、愛に溢れたる人生観に。

主よ、我は主によりて堅し。熱愛なり。我が生涯は十字架の許に。聖国に歓ぶ聖徒の群に加えられんこと、これに勝る栄誉なし。彼等の歩みし跡を人類救済のために。アーメン。

○1925年3月4日（水）

晴。汝らは世の光なり。僕の第2学期の平均点、この度は70点以上。いかほどにても多々益々よしと云うのである。70点がレヴェルである。関ヶ原の戦である。奮闘せざるべからず。今日、宣ちゃんが3年の思い出を残して水戸を去った。

○1925年3月5日（木）

晴。春らしき暖かき日。御子を信ずるものは永遠の生命を有つ。戦は迫りぬ。我が罪ほろぼしか、之れ。奮然として戦い、優勝して来るべき学年に猛進せよ。

○1925年3月6日（金）

晴。3年！　将に満たんとす。罪のどん底に入りたる汝は最早、その地獄にとどまるこ

とは出来ない。もし然かせば、そは救われざるなり死なり。汝は聖潔にあずからざるべからざるなり。救の聖手は来りたるなり。既に来れり。最早、汝は迷えるものにあらざるなり。汝は聖潔の生活をなすべきなり。3年は過ぎんとす。

霊、潔められよ。肉体、健全を保てよ。再びかの不信と愚行に出づるなかれ。ビー・クリスチャン！　問題は多くあり、しかれどもそれ幹の枝たるもののみなり。問題の幹なるものは一つあり。そは信仰、汝にあるや。ただこの一事なりとす。真の信仰あるときに、汝はその行に於てまた浄からざるを得ず。身体は健全ならざるを得ず。業務に忠実ならざるを得ず。

〇１９２５年3月7日（土）

晴。烈風吹きまきて砂塵を捲く。巻風起こりて木の葉、塵柱をなす。3学生及第発表。宣ちゃん勿論及第。祝の音信をなす。

〇１９２５年3月8日（日）

晴。第二観梅日とかいって、町は大さわぎ。特別列車もあるようだ。試験は明日、安息日に勉強をする辛さ。罪人よ。諸の罪をおかして、諸の病を得たり。諸の過をなして、諸の傷を得たり。神、すてたまわざるなり、なおも。ああ、罪人よ、かえれ。浄かれ、健全なれ、神の前に。神、浄め給う。その御手は今、今！　汝の身に置かれてあるなり。受けよ、求めよ。与えらるるなり。

〇１９２５年3月9日（月）

晴。

Let us draw near with a true heart in full assurance of faith.

〔真の心と全き信仰とをもて神に近づくべし（ヘブル10・22）〕

No problem, no question is in me but of faith.

〔私にはしかし信仰の、何の問題も疑問もない〕

第3学期試験開始。

〇１９２５年3月10日（火）

晴。奉天陥落の日。陸軍記念日である。試験と試験勉強で全部である。

〇１９２５年3月11日（水）

晴、烈風。今日は中休みの日である。明日から土曜までまて試験である。非常な風で気持がわるかった。塵と春の圧しつけるような暖かみと試験勉強と睡眠不足に責められて、こんな圧な気持の日はない。夜になって凪いでくれ、明月が東の松の梢に懸かっているの

を見たときは、その昼と夜との相違のあまりに甚だしいのに同日の心地はしなかった。静かな、月と星の夜を今日は愛す。

新聞で、女学生が過度の試験勉強のために心臓マヒを起こして死せるを読み、教育制度の一大欠陥なるを、犠牲者によって痛烈に証明された（試験制度の）のを感じた。ここに益々義憤を起こさざる得ない。やがて必ず試験制度の破壊される日が来るだろう。否、諸教育制度の改革さるべき日がこなければならない。若し起つべくば私はその陣頭に起たん。私はその根本問題にふれん。抑えつけの消極的な東洋道徳では駄目である。生ける精神的なところにその根本を置かざれば駄目である。戦陣はいずれの社会なるかを知らざれど、我は福音のために戦わん。

今日の汝を顧みて言う。貴きは一日よ、一日は貴し。汝これを知れ。人生は一日なり。一日は人生なり。と我は信ず。はじめ律法あり、後に福音来る。我、福音によりて生く。いと小さき一日、いと小さきこと。神と共にあゆみて、貴く麗しく、益あることなり。実を結ぶことなり。

○1925年3月12日（木）

晴、雪。試験。心理、国語、グンデルト先生独逸語。午後から雪が降る。

○1925年3月13日（金）

晴。法制、科学の試験。第2学期は法制、青。今度は90点の白らしい。青白の白になった。大いに名誉回復した。科学も相当。

○1925年3月14日（土）

晴。昨日は近藤が扁桃腺の腫れたのと、過度の疲労（睡眠不足）とで急に倒れて床につき、40度の熱は出、咽喉は痛いで、氷や薬や医者で大騒ぎ、杉浦と僕でその看病にあたる。試験勉強をしはじめたのは午後8時すぎ。そうとう午前4時までガンバッタため、今日はふらふらして、僕はすこし熱っぽく、頭はぐらつき、脈拍は百近いので、終日床について回復をはかった。今日は実吉先生の独逸語の試験。今学期は随分がんばった。睡眠時間平均3時間から4時間である。成績は75点平均くらいだろうと思う。これ位がんばらなければ及第は出来ないだろう。とにかく、及落は別としてベストを尽くした。

母上は東京に待って居られる。あまり長く水戸に居るべきではない。それに今度の1学期と云うのは僕自身の罪から病を得たのだから、それを挽回するは僕の義務であったので。

神よ、来る学年は僕の所謂学校生活の最後の年である。最も、神の御眼より見給いて、よき年を送らしめ給え。

〇１９２５年３月15日（日）

晴。最終の観梅デーとか云って馬鹿連が大勢、行列をなし公園へ行く。梅観ではない、人観である。公園に梅で一杯と云うよりも人で一杯だろう。

雪が一寸降った。みんな困ったでろう。馬鹿さ加減をそれで知るがいい。今日は終日、休養と近藤の看病とで終る。

「辰雄さんはこんないいものを戴いたんですもの、感謝でなくてなんでしょう。いつまでもおすがりしてしっかり北京の跡を歩いてください」

と云われた高島の伯母様のお言葉を思い出して、涙でお祈りを捧げるのである。

神よ、導き給え、光の道へ。アーメン。

〇１９２５年３月16日（月）

晴。烈風ふきすさぶ。水戸の3月の冬物がはじまった。友の看病で今日も桐寮に居る。母上から看病なら、いくらでも水戸に居てあげろとのお音信であるから、彼が東京へ帰るときに一緒に帰ってやろうと思った。受験生が来た。色々な人が来た。雑然としている。あてにならぬは人言である。不信の人の言である。おそろしきは不信の人の社会である。彼等は言辞を弄して、顔色を用いて交際をなす。会しては離る。必ず離反する。あわれなるは彼等の交際である。社交、のろわれたるかな！　現代人、現代の青年までも、ああ、我が身辺の友までが！　我、彼等と何の関わりあらんや。

『聖書の研究』がとどいた。彼と私は書中に語り、先生の言辞に接し、「彼」を仰ぎて、我は益々この世のものならずを知った。身は俗塵にかこまるるとも、我が魂のみはいかなる俗世のものもこれをけがすを得ざるなりと確信し得て、感謝極まりなかった。

人言問題にあらず、そしらるとも、誤解さるるも可なり。全然問題ならず。損を蒙（こうむ）るも、貪りを受くるも可なり。この世は我に於て益あるところにあらざるが故なり。来る世の栄光にくらぶべくもあらざるが故なり。

Oh! My Brother Blood!　〔おお！　私の兄上の血！
Once that made me sad,　かつてそれは私を悲しませたが、
But then I believe that shed　今は私は信じている、その血は流されたのだ、
For my faith and strength.　私の信仰と強さのために〕

「耐え忍びて汝の生命を全うせよ！」（ルカ21・19）

Fasset eure Seelen mit Geduld!

〇１９２５年３月17日（火）

晴。強風、塵埃。東京はさぞ酷（ひど）からんと思った。病人看護、友の心を知らずや。汝は我儘ならずやとは思ったが、病人なるが故に忍んだ。彼と彼のところへ来る人々を見る。ああ、

知らず、彼等は我を奴隷視するが如し。腐敗せるかな、彼等の心。嫉妬、偏愛、悪口、非難、これ等が学生間に行わるるを見て、我は憂えざるを得ず。滅亡の日近し。何ぞ女々しき少々の戦闘争をなすや。

○1925年3月18日（水）

晴。10時の汽車で近藤と共に帰り、団も一緒になった。彼を上野駅まで無事に伴い別れて、一安心した。彼の回復を待つ。

帰宅。母上様も、見る人毎に僕を太った太ったと云う。試験で1週間いじめられ、睡眠平均3～4時間。しかも病人の看護をして帰って来て、太った太ったに驚き且つ、この体力のために感謝せざるを得なかった。及第を知らず、ただ毎日毎日これからは益々、神の栄光のために営々として働くことが最大の快楽である。

母上様のよろこばれるのを見てもまた太る様な気がする。

○1925年3月19日（木）

晴。今日は午前7時に起きた。母上をお伴れして出掛けた。平口様へ行った。母上は、平口様と午後1時までお話しをされる様に、僕は武田へ行く様に。そして、午後1時に平口様と3人で二葉幼稚園（新宿）へ行った。安井女史の「現代思想の傾向」と云う題のお話があったのである。個人主義を別けて、快楽欲望的個人主義（利固主義）と、人格的個人主義とに別たれ、人格的個人主義、クリスチャン的個人主義（言語は妙であるが、僕がつけたもの）についてよく解った。しかして、結婚問題、家庭問題等、実に然り！然り！と有難く拝聴せざるを得なかった。

結婚問題、誠にそれは最大の問題である。真剣なる問題である。僕も思う。真に神により、信仰によりて結ばれるにあらざれば、結婚せざるを。神のよき配偶者を僕にあたえ給うにあらざれば、強いて求めざるを。家庭（ホーム）、それは神によりて結ばれざれば、永遠の幸福を得るあたわず。平和を得る得ずである。教育々々と云う。子供の品性は家庭によって支配される。即ち、家庭が純なる愛なるものにあらざれば、両親が真の平和の関係にあらざれば、子は到底、よく育て上るものにあらず。宗教、キリスト教、あるにあらざれば。

「人格の真義、それはキリスト教を信仰するにあらざれば、解する能わずとは、不信者には酷なる言なるかも知れぬが、キリスト教を味わうものには、己れの体験によりて、誠に然り！と言わしめる事実である」

とは、僕も幾分か之に首肯し得る所で有難く感じた。安井女史、野口女史、共に誠に信仰と行とのそなわりたる、立派なクリスチャナである。ケンタッキー州に於ける無学者教育に関するお話は実にクリスチャン及びクリスチャンジェントルマンの真精神の発露にして、実にクリスチャンにあらざれば、かかる行為は到底なし難しと感じた。一通りの道徳心か

らはあの美徳は現われて来ない。そこに神の力、神の愛が流れているのである。人力以上、人心以上のものがある。人は何と云おうともこの美わしき点は、到底クリスチャンの心とならざれば、自分がクリスチャンにならざれば、殆ど解し得ぬことと思った。

「エリヤの祈祷」（独逸語）と云うのを一令嬢が独唱した。実にうまかった。ちょっと今までにあれほどのを聞いたことがなかった。ことに讃美歌であり、聖なる場所である故に、感ずることは深かった。よき会合であった。感謝する2時間を過ごさせていただいた。貴婦人連がかくして次第に信仰に入り行くを見て、うれしく思った。武田の叔母様も身体の具合がよろしくてお出でになればよいと思った。

野口様は一昨年（１９２３年）12月から毎月第3木曜日にこの催しを二葉幼稚園でなされる由。内村先生、山室軍平大佐等のお話もよくあるのである。山室大佐のはいつかうかがったことがある。

夜、実さんが来られる。僕は段々、何だか有難いものを受け導かれ、やがて、主の一大使命を果たさざるべからざるに至るならんとの感を抱く様になって来た。何れにしろ、主にありては一日は千年、千年は一日なるが故に。我が貴き一日一日も確歩せざるべからずである。

○１９２５年3月20日（金）

晴。今日は終日、家に居る。聖書コリント前書を読む。『聖書の研究』、『旧約と新約』を読む。母上様に読んでさしあげる。家の中の整理をした。入浴した。

主は、我が天分の全うするまでは、我を召し給うことなし。確信である。

母上と信仰上のお話をして、母上様の贖罪の意義の本当に僕達の信仰の様でないのを知って失望した、悲しんだ。主の前に祈り奉った。富永先生によって導かれた母上はやや惜しくある。しかし、平口様や母上には、あれ位の方がかえってわかりやすかったかも知れぬが。しかし僕の告白によりて母上は、僕の信仰の方が神との本当の親しき関係に立ち、シックリとなり、熱切であろうと云われ、僕を羨まれたが。そこまで思ってくださる母上なら、今にこの信仰の母上に授けられんことのさほど遠からざらんを思いて、益々祈り奉る次第であった。

藤井先生『旧約と新約』3月号に、現代之日本人と云う論題あり。真の愛国の人、先生を慕うこと切なると共に、先生と共に憂国の念勃然たるものがあり、僕も先生達に従って第二の日本のために立たんと思った。僕の使命はどうしても大ならざるを得ざる様である。百姓が一生懸命に耕す様に、僕は僕の頭を一生懸命に耕して、精神界に働かんものである。

○１９２５年3月21日（土）

晴。午前10時、兄上と二人で隅田川へ出掛ける。青木の喬さん、四郎ちゃん、宣ちゃん、

既に待って居られる。附属の新艇を借りてボートで一日を面白く過ごそうというのである。11時出艇。上に向かって、潮に乗り、風に逆らって上った。新米の連中で、ローリングをすること、一度、蒸気の波をかぶって浸水、おまけに水栓がゆるくて次第に水が入り、なかなか難行である。1時少し前、小台（おだい）に着いた。上陸して、昼食をしたためた。宣ちゃんは音楽会へ行くので別れ、三弦さんが交替に加入された。1時再び纜（ともづな）を解き、上漕、やがて下る。4時半頃、附属の艇庫に帰った。

今日は連日の風に似ず、おだやかな日で、水上も鏡の如く、ボートには絶好の日であった。小台の渡しのあたりは昔を偲ばせてお互いに思い出を語った。久しぶりで皆で愉快に河上に日を送った。春季皇霊祭で飛行機もとんでいた。雷門で別れた。夜、斎藤さんのところへ遊びに行った。10時頃お風呂に入った。12時頃ねた。

○1925年3月22日（日）

晴。昨日、英語の讃美歌集と『真理なる聖書』と云う書とを、ボートの帰り九段の向山堂で買って来た。知りたいと思っていた歌が沢山あってうれしかった。今日は内村先生のところへ行きたかったが、会員でないため行くことが出来ない。一人で午前を聖書、ヤコブ書第1章を、独逸語の聖書と対照で読んだ。この頃の僕には強くひびくことが多かった。英語の讃美歌を歌った。この間の安井女史のお話に、クリスチャンの自己の労を労と思わず、少しも、人に恩を帰せる様なことのないと云うことは、本当にクリスチャンならではと思った。

「[15]**慾孕みて罪を生み、罪成りて死を生む。……[22]ただ御言を聞くのみにして、己を欺く者とならず、之を行ふ者となれ。**」（ヤコブ1・15、22）〔独文〕

午後、母上様と染井へ墓参に行った。兄上はいつもの様に僕と語った。

○1925年3月23日（月）

曇。新生活、真の生活に生きなければならない。どう考えても僕は逸民（いつみん）であることは出来ない。音楽や、活動〔映画〕や、芝居や、何かの娯楽に眼や耳を傾けることの出来る自分ではない。聖書を読むことは僕の毎日のどうしても省くべからざる大切なことである。我が霊はこれによって生くるからである。英独の勉強は之、僕のかくべからざる毎日の頭脳の労働でなければならぬ。宗教書を読むこと、これ聖書の副なるものとしてまた欠くを得ざるものである。僕のホームに対する僕のつとめあり。

隣人に対する愛の心あらざるべからず。我が生きる一日は実に貴き哉。神と共に一日を見て、これは千年の如くある。何ぞ人生の短きを嘆ずるの要あらんや。我は過去を悔いじ。過去にて我は如何に多くの貴き神の時間を徒費したことよ。あるいは茫然（ぼうぜん）と、あるいはくだらぬ遊びに、くだらぬ人との対談に、くだらぬ本に。我はこの贖いをなさざるべからず。

贖いと云いて努むるに非ず。我が神を思いつつ勤むるときにその贖いはなさるるのである。
母上にコリント後書を読んで差し上げた。贖罪の教義を母上にも段々入れてあげたく、色々と本を読んであげる。母上の心霊に一大光明の下らんことを祈る。

○1925年3月24日（火）

晴。午前、庭を耕す。午後、少し読書。神保町へ買物に行く。夜、武田へ行く。宣ちゃんのお祝に母上と。青木の叔母様、四郎ちゃん来て居られる。一緒に帰る。10時頃帰宅。11時すぎ床に就く。
丸善で、レン子さんにあげる「かなアンデルセン」を買って来た。全甲と云う成績であるとのこと。今度2年生になられる。

○1925年3月25日（水）

晴。今日はこの加賀町〔東京市牛込区市ヶ谷加賀町〕へ引越して来てから丁度2年目の日である。一昨年の今日は日曜で、大手町へ聖書の御講義をうかがいに行ったことを憶えている。晩、斎藤さんへ遊びに行った。

○1925年3月26日（木）

晴。午後ちょっと九段の方へ行った。母上の歯の修繕もして来た。お昼は斎藤さんでパンの御馳走になった。夜、入浴した。英語の讃美歌を30近くおぼえた。
"English Grammar Series By J.C.Nesfield Book4 Idiom,Grammar & Synthesis for High Sch." を斎藤さんに戴いた。Handbook to the Grammar of the Greek Testament〔ギリシャ語新約聖書の文法ハンドブック〕を昨日から30分ずつ位、読むことにした。いつまでつづくか問題であるが、高校時代の最後の1年に、と思ってはじめた。兄上様が北京へ行かれる年に買われたものである。勿論そのために独逸語の勉強を妨げることあらば廃せんと思うが。徒費する時間を30分と思えば、そのかわりに Greek Testament〔ギリシャ語新約聖書〕を少しずつでも読むことはどんなに「よい」ことであろうか。
今日、村上先生の奥様から母上のところへ僕の及第につき電報が来た。高校にて及第したとて電報がくる。何となさけない僕だろう。第1学期を休んだためとはいえ、休んだのはやはり僕がわるいんで、悪い成績をとるよりも病を得て休んだことは更にわるいことであった。
……〔英文省略 No.855〕……
しかし感謝する。僕は夏休後、幾度となく思った。身体をつくるために学校を休んだ。1年遅れて静養しようと。しかし、Inspiration〔インスピレーション〕が輝いた。否、然らず、汝の救わるるは静養によってに非ず、汝は唯、信仰による汝の歩みあるのみと。神はその

偉大なる力を僕にあらわし給うた。僕は決然として立った。身体はなかなか回復しなかったが、確く信仰に立たんとした。神は僕に臨み給うたが故に、僕の信仰はさほど強くなかったにせよ、僕は安心して日々を送った。僕はついに12貫800匁〔48 kg〕という体重を与えられた。今までにかくの如き体重まで達したことはなかった。しかして、第2学期、第3学期の試験もかなりの成績をとり得て、ここに第1学期を償い得た。しかして、及第することを得た。僕は誠に主の御恩恵の大なるを感謝する。その及第したがためではない。そのかくまで信仰に僕を歩ましめ給いし御力にである。

僕は使徒パウロ等の信仰の幾分かを戴いている如く思う。ただまだ弱きは、信仰ありてその行なきことである。まだまだである。朝によろこび起きて、夕いかに己れの信仰にそむきて肉にあゆみしかを顧みるときに涙であるのである。

主よ、願わくは、信仰、ああこのうるわしき信仰にそえて、それにふさわしき実を結ばしめたまえ。信仰ありてその実なくば、行なくば何ぞ。主よ、願わくは、実行的基督者たらしめ給え。主よ、若し然くなり得ました日には、僕はいかに主に幸なるものとなることを得ることでございましょう。主よ、主よ、願わくは、願わくは。

かの兄上は何のために召されしか。我が母上は何のために盲目になられしか。この二事を思いますときに、私は内に沈潜し、心臓は痛くこのために動き、両眼は深き光と涙とに天を仰ぎ、主よ！と呼び奉るのであります。

主よ、この二事のために、我が身は全く主に捧げらるべきものとなりました。

There is a Cross for me! Amen!〔我がために十字架あり！　アーメン！〕

○1925年3月27日（金）

曇。午前、読書、聖書。午後、お使い。ボール、近所の女の子も遊んでいた。皆快楽なすなおな子である。庭の耕作、ユリが2株芽を出しているのに掘りあてた。鉢にうつした。武田の叔母様、母上の見舞に来られた。夜、斎藤さんのお風呂に入りていただいた。13貫〔48.75 kg〕。若し汝今後、不節制によりてこの体重を損ずることあらば、汝は世界中にて最もアワレナル罪人なり。確く信仰に歩みて、愛の業をなせ。

○1925年3月28日（土）

晴。午前、歯医高橋氏へ母上のお使いで行き、大学病院へ耳と鼻とを一寸見て戴きに行く。異状なし。徒歩、神田駅へ行き、省線電車。中野へ直行。山本へ行く。義雄さん、小学校入学に付き、一寸したお祝のエンピツと手帳を持って行った。皆にパンをやった。姉上をはじめ、三人とも元気で笑顔で僕を迎えてくださった。1時頃であった。丁度これから御飯というので、御馳走になった。お汁粉である。おもちを10食べた。久しぶりでうまかった。馬ゴッコだの、マリナゲだの、相撲だのをして小さい人々の相手になった。夕飯は皆にお

そばとうどんの御馳走をした。大すきなもんだから大よろこびでよく食べてくれた。7時すこし前、別れを告げた。文鳥が飼ってあった。

○1925年3月29日（日）

雨。午前8時起床。8時半出掛けた。市ヶ谷駅から省線で渋谷へ。渋谷から玉川電車で駒沢新町へ、下車。藤井先生のお宅のお集まりに列した。僕は初めてである。僕の上ったときは9時半で誰も来て居られなかった。40分ほどして女の方が一人来られた。高島の伯母様に似て居られるので、ハッと思ったくらいだった。そして伯母様を思うた。先生の書架に眼を注いだ。充棟（じゅうとう）とはこのことである。そして皆、聖なる書に関するもののみ。慕わしき限りであった。ギリシヤ聖書もあった。

10時半から朝のお集まりは始まった。讃美歌35を讃美した。先生の切なる、愛なる、憂国なる祈りがささげられた。聖書黙示録21章の朗読あり。讃美歌215を歌った。黙示録21章に関するお話あり。その真意の幾分をか察し得て有難く、大なる希望に満ちた。エルサレムの聖なる都！　その宝石！　讃美歌189「その門は終日とじず、此に夜あることなし」たえなるめぐみや、を歌って祈り、礼拝は終った。先生は僕の健康をよろこんで下さった。信仰へ！　信仰へ。

どこまでも棹（さお）さん真理と生命の大海へ。

知らない方もよき基督者であるが故に何となく、親しく知己の如くお話をして渋谷まで一緒に来て、お別れをした。中山さんも来て居られた。

僕は、時間の徒費をサンザンした、なまけものである。これよりのちは主のために、セッセと働かねばならぬ。主にありて働くときに、その中に休みもあるのである。清き快、それは心に休安をあたえるものである。

夜、斎藤さんで僕を呼んで下さった。僕をよく款待（かんたい）して下さる。愛して下さる。こうなっては義理にも痩せることは出来ぬ。基督者、しっかりした基督者。人を愛し、己れを卑（ひく）うして主に仕える心にて人につかえて、主の愛を人にながす基督者らしい基督者になりたいのが望みである。

○1925年3月30日（月）

晴。この間から毎日1、2章ずつ読んで、今日でペテロ前書、ペテロ後書、ヤコブ書、これだけ読んだ〔ドイツ語聖書を〕。追々、新約全書をルーテルの訳で読みたいと思っている。

独逸語2時間、英語1時間。これはいかなる日でも我に主の命じ給うところ。必ずなさざるべからざる務なり。然らば、主は1年の後、よき主のはかりを教え給わん。

お午頃、青木の叔母様が来られた。泰ちゃん入学されたとのこと。僕の預言が当たった。彼の心身のために――今、消沈の極である故に――祝さざるを得ない。

1時半頃出掛けて、雑司ヶ谷なる高島の伯母様のお墓へお詣りに行った。護国寺で下車、数町歩いて墓地へ来た。左に見える多くの墓の中に十字架の墓碑が所々に見られた。何気なく入り行きてその一つを見れば、こは如何に、

「RAPHAEL KOEBER 1848～1923」

というのがあった。正しくケーベル先生のお墓である。帽を脱いで墓前に「先生の霊安かれ」と祈った。〔ラファエル・ケーベルの墓石のスケッチあり〕

お花とお香とを買って、高島様のお墓へ行った。初めてである。中央に正五位勲五等高島拴太の墓と書かれたるがあり、右に高島○○荘の墓と書かれたるがあった。左に、

なんぢわが首にあぶらをそそぎ給ふ

十　高島鴻子之　墓

わが酒杯はあふるるなり

明7〔1874〕.12.15～大13〔1924〕.8.2

とあった。墓前に黙祷。僕の胸中、勃々（ぼつ）として湧き来るものあり。感極まって涙流れ、泣を発せんばかりであった。伯母様は僕に近かった。否、僕のうちに居られた。涙も拭われた。真の歓びが湧いて来た。主よ、然り、十字架の故に、伯母様も僕も安し、と言った。地上の花は、昇げられて天上の星と輝いている。エルサレムの都を築く麗（うるわ）しの一宝玉と化した。うるわしの墓なるから、再臨の日を待ち居給う。感謝と讃美とはここに在り。とどまること暫し、伯母様は常に僕と共に在り。僕を導かれる。僕をその愛をもて慰められると確信して、はじめて僕の足も去り得た。生前の思い出をたどりつつ帰った。

A　Ω

Of your charity Pray

For the Repose of the Soul of

Takashima Kōko

Died August 2nd,1924. Born Dec.15,1874

Aged 50yeas

Vivas in Deo.

と書いて上げたい。

Du salbest mein Haupt mit Öl und schenkest mit voll ein.

〔**なんぢわが首にあぶらをそそぎたまふ。わが酒杯はあふるるなり**〕

夜、斎藤さんへ行った。歌子さん（12）、連子さん、愛子さん等のダンスや唱歌を見せた

り聞かせたりしてもらった。臆面なく無邪気にやって見せた。母上様のお病気の快癒されん日を待つ。僕は祈りの人であらねばならぬことを感じた。

〇1925年3月31日（火）

晴。春日和。午前9時出掛ける。葡萄酒とネープルと洋菓子と鶴ノ子のお菓子とをもって吉原へ叔母様のお見舞に兼、遊びに行く。京成電車、速くて気持がよい。のどかな田舎の景色が展開された。桃が盛りであった。中川に釣りするものあり。海が湖面の如くおだやか。皆、驚いて僕を迎えられた。また僕の健康を祝ってくださった。吉彌様とレイちゃんと3人で海岸を散歩した。あんまりいい天気で、無風でポカポカするので、龍神宮のところで、ねっころがってグウグウ昼寝をした。夕方、小丘にのぼって、大海より来る海風を吸い込んだ。7時すこし過ぎ、おいとまをした。ハマグリをいただく。